

# 火星



平成17年 5月号

# 七曜抄 (二)

山尾玉藻

剪定の老松に舟寄せてをり

子と遊ぶ筋肉は別クローバー

蝌蚪どどと動きて遊び下手なりし

莖立菜より参道の始まれる

腓もて沈丁の闇ぬけにけり

いつみてもどこか欠けゐるさくら貝

をんならの足が水打つ桜かな

指先で円卓廻す花の昼

靴下げる人のつづける花の冷

花びらの散りこむ夜の山女槽

# 太白星

柳生千枝子

雪に香のあり咳をして咳をして  
雪を被て庭石その他獣めく  
雪道を行く何時の間の沈黙か  
越の雪祖父母の恋を想ひをり  
ふらここを漕ぐ一瞬の無重力  
母の呼ぶ声鞆鞆の見捨てられ  
老い見ゆる己が十指に水ぬるむ

杉浦典子

ランドセル桑食む音を聞きにきし  
藁食める牛の上なる蚕棚

囀や 劍玉に 肩とんがらせ  
雁 歸る頃 そば好きとうどん好き  
水仙忌 先生も 風邪長かりき  
春の土均せし シャベル立てておく  
鳥 発ちし音に 椿の揺れてをり

浜口高子

昼月の消えかねてゐる雪しまき  
新聞紙に 赤子を置きし春の山  
向う岸へ 声をかけたり水ぬるむ  
朝寝せし 瞼に 訃報ありにけり  
郵袋の口 開いてゐる春の雪  
萩若葉 夫の骨ある山にかな  
己が顔あり 春泥の水たまり

# 火星作品

## 山尾玉藻選

地球儀をまた廻したる春炬燵  
母の家へ母に躐きゆく桑の花  
しなやかに蓬を捕らふ牛の舌  
いかなごとを買ふ列にゐてさびしかり  
駅伝のしんがりを待つ冬景色  
砂利舟に砂利のこんもり水温む  
梅一輪幼子の靴揃へあり  
茎立の向う踏切鳴つてをり  
前を行く声の親しき春の宵  
砂抜きの浅蜷ごとりと動きけり  
針納め水やはらかく手を洗ふ  
涅槃西風鶏冠の傷をふやしけり  
水の輪の流れてゆきし春障子

明石戸栗末廣  
豊中廣畑忠明  
姫路松たかし

春宵の星より遠き船あかり  
瀧夜の水音立てし人の影  
二ヶ月のひかり啄む放ち鶏  
白梅の秀つ枝にありし日暮いろ  
沖波の白の駆けくゝる厩出し  
立春大吉病室替はれと言はれけり  
うすらひに縮緬雛の出できたる  
鴨の啄みし萵苣搔きにけり  
ひとつづつ喉飴わける水仙忌  
日照雨してパンジーの顔上をむく  
体温計さしたままなり百千鳥  
欄干にならびし鷗佛生会  
節分のいささか低し男山  
かどかどに梅咲く町の葬かな  
春暁のくらがりにあり母の杖  
飛行機の音のかぶさる春氷  
大阪の曇天の下亀鳴けり

八幡 吉田島江

大和郡山 吉田康子

八幡 大山文子

# 選のあとに

山尾 玉藻

むしる癒しの風である。

体温計さしたままなり百千鳥 吉田 康子

熱っぽい程度で大した熱で無いことが知れる。「さしたままなり」で一句に仕立て上げた。季語「百千鳥」がほじよい。

待たされて眉引きなほす春の宵 戸田 春月

「眉引きなほす」という行為から考えれば、待たす相手は男性よりもむしろ女性であろう。また「眉引きなほす」行為は、秋の宵ではなくゆつたりとした「春の宵」故である。

靴下の指の五つが春を待つ 波田美智子

テレビか本などで五つ指の靴下の健康法を知られたのである。「春を待つ」がこの句の生命。この作家らしい齢を感じると共に、「指の五つが」に可愛らしい俳諧味がある。

竹馬の歩きはじめの音なりし 垣岡 映子

作者は障子内にもおられるのであろう、聞きとめた「竹馬」の音はリズム感のあるものではなく躑くような音だったのである。竹馬の主は初心者かも知れないが、作者の表現通り歩くリズムがとれるまでのもたつき音だったのだろう。ちよつとした景の一瞬を逃さず捉えた佳品である。(以下略)

いかなごとを買ふ列にあてさびしかり 戸栗 末廣

「さびしかり」に共感し納得もするが、果してこの共感は何処からきているのであろう。いかなごの代りに「白魚」を当ててみたが句にならない。小魚と言っただけではなさそうだし、鯛や鮓と違い庶民の食べ物であることが必要らしい。と色々考えてみたが、結局のところ「買ふ列にあて」の列に並ぶと言ふこと行為自体がさびしいのである。

梅一輪 幼子の靴揃へあり 廣畑 忠明

この句の「梅一輪」は勿論紅梅。「幼子の靴」は三歳ぐらいまでで、やはり女の子のものが良い。靴を揃えたのは女の子自身であろう。いじらしいほど可憐な句である。恒星園作品へ春泥に鳥の足跡松葉ほど、も、「松葉ほど」が非常に良い。

涅槃西風鶏冠の傷をふやしけり 松 たかし

「涅槃西風」とは涅槃の頃に吹く柔らかくやさしい西風であり、「涅槃西風」が「鶏冠の傷」を増やしたのではない。この鶏は雄鶏で雌を争った時の傷であろう。「涅槃西風」は

# 恒星圈

田中英子

種いもの面選ることに始まりぬ  
裏山の風にしたがふ獵名残  
涸川に貨物列車のさしかかる  
火渡りのあとの足裏や寒明くる  
ほとぶまで日の斑のあそぶ猫柳

田中みゐる

大東由美子

雪像のまなこ大きく彫られけり  
うねの土撫でてをりたり日脚伸ぶ  
大寒の日に干されたるうどんかな  
ひとしきり尾を振はせてさへずれる  
古草の馬柵に来て父の声

バレンティンフルールシヨコラ賜りぬ  
春燈籠のイェンロン舞ひをさむ  
ちらほらと魚氷に上る竜田川  
春寒く兄と見て居る甲山  
春雪のはげしさにあり甲山

高尾豊子

五十鈴川夫と渡りて春浅し  
寒肥を撒く腰つきと思ひけり  
探梅や岬の裾の魚市場  
お晨朝終へし白洲の春の雪  
配達の荷台カタカタ冬菜畑

土屋酔月

躓きしところにありぬ露の臺  
晩学の明日を信じて木の芽和  
薄氷の解けて水辺を離れたる  
着膨れて妻の繰り言ひとり言  
来るときも去るもこの道揚雲雀

# 獅子座

山尾玉藻推薦

山田美恵子

ものの芽に開きしチェロの皮ケース  
きさらぎの音なき花の雫かな  
春の雪文楽座より電話くる  
覚めきらず眠れず春の夢のあと

波田美智子

たんぽぽや人それぞれに歩幅あり  
ばあちゃんど誰か呼びたる朧の夜  
無人店櫛の芽並ぶ頃となり  
灯点して子の辞書使ふ春炬燵

今里満子

金縷梅や山の日射しに縊を解く  
遠きほど眩しき湖や猫柳  
草の芽や翼あるもの皆飛べよ  
あいさつの少し長びく梅日和

垣岡暎子

黄水仙七十才のストレッツチ  
春浅し絹の里より桑のジャム  
着せ替への人形遊び桑に雨  
三輪車のいつたりきたり水温む

重見久子

寒椿真向ひにバス待ちにけり  
梅の花作務衣の和尚現はるる  
桃の咲く向うに母と父の声  
呼び合うて来て寄り合うて日向ぼこ

高松由利子

方言をかくしおほせず梅畑  
玉造教会古び凍ゆるむ  
二上山も生駒山も今日の大霞  
玉くづる椿の紅の長屋門

中上照代

二月尽佳きことばかり指折りて  
いづれより見ても全き白椿  
料峭や鴉の群の一斉に  
きさらぎの空に貼りつく昼の月